要旨

現代陶芸における「古染付」表現の可能性

大学院博士後期課程美術研究科　工芸領域陶芸
鈴木　智亜貴

日本では「古染付」と呼ばれる 17 世紀前半に中国の景徳鎮民窯(現江西省)で生産されたと考えられ日本に舶載された器群がある。明時代末期の天啓年間(1621-1627)前後の短い期間であり、江戸初期の茶人や富裕層らに愛好され多数伝世している。器種、器形、図様には、日本陶磁との関わりが強く、日本でのみ伝世されていることから注文によって作られたと認識されている。しかし注文品であることを示す文献資料や考古資料は未だ少ない。こうした古染付の特殊な背景もあり伝世品は装飾性に天衣無縫・当意即妙・自由闊達・滑稽諧謔を指摘する先行研究は多い。確かに一見すると粗悪にみえるが、かえって均整のとれた人工的な美しさとは違う趣があるため、それまでの中国磁器とは大いに異なる。特にそこに描かれている絵付けが印象的であり、のびのびとした雰囲気でありながら作品としての存在感があり、くだけた表現の中でも仕事の確かさとデザイン性が窺われる。また、意匠の特徴から作品がもつ思想として歪みを許容している器と定義した。歪みの許容を見出した理由は二つある。一つ目は完成における認識のずれであり、二つ目は空間と時間により変貌する作品評価である。この二点から、完璧な作品とはどういったものかと、誰もまだ発表したことのないオリジナルなアイディアを世に問う手段として作品を生み出すことへの違和感について考察し、世間一般の価値基準では主流として共有されにくい人間の無意識/有意識を納める「寛容の器」としての作品の価値を論じると共に、筆者は、作家という立場から古染付の意匠の魅力と模作を通じて技法の解明を考察し、博士審査提出作品への経緯を述べる。

本論は三章から構成される。

第一章では、古染付の研究史について日本での研究文献を参考にしてどの様に考察されてきたのかを時系列に沿って述べ、分類と生産形態を振り返った。古染付の造形について、実例にもとづきつつその造形的な特色を探る。具体的には「染付地獄極楽図花菱型鉢」「染付蟹童子図袋型掛花入」を調査した。器形を計測し、釉薬の色調、虫喰い、絵付について人物表現、動物表現、余白や線などの項目に分けて分析を行い制作者の立場から不可解な表現について整理した。

第二章では、中国の景徳鎮の陶工による染付磁器製造過程を調査した。そして古典作品の意匠を現代陶芸へ反映させる可能性を探るための古染付実験制作の課題を明らかにする。中国では 1950 年代に景徳鎮陶業の復興のために、その工芸についての大規模な研究がおこなわれている。その研究報告「景徳鎮磁器の研究」を参照し、陶磁器の作成に使う磁器素地と釉薬の組成理解から始め、型起こしの技法、絵付けに使う画料、虫喰いの起こる原因と作成方法を調査した。そこから自身の制作環境において手に入る原料や制作過程での改良点が明確になった。

第三章では、博士提出作品についてテーマとコンセプト、概要、実験制作と自作品の制作過程、展示について論じた。古染付の制作過程の検証を行うにあたり、以前より自身の制作の参考としてきた資料である石洞美術館所蔵作品の中から「染付地獄極楽図花菱型鉢」を実見調査にもとづいて実験制作し各工程を振り返った。そして、古典「うつし」から現代陶芸への展開、現代において古典を再現する意味、ひずむ-自身の思惑を超える形の捉え方について言及する。

古染付は注文に沿ってはいるがそれだけではなく陶工が考え創作した部分について検討した。陶磁器制作の過程において実際の現場では、表現に制限があることや意図しない形態の誕生は日常茶飯事である。その不確定要素を含む製造過程では注文通りの数のみを作るとは考えづらい。現地の陶工が注文内容と焼造物との折り合いをつけ完成品を選び取る判断は非常に興味深い。残念ながら景徳鎮民窯での考古学的な資料は未だ乏しいためどれだけの古染付が作られていたのかは判然としないが、自身で制作を模倣する過程での焼造物の成功率や表現の描き分けを実践することで当時の様子を思索した。

本論においてオリジナル作品とは何かを考察した。芸術は人の心に作用するものとしたら、その場合の作用とは人々の心を特定の目的へ導くことだといえよう。しかし筆者は、鑑賞者が実際に知覚できる現象として作品と対峙することで自身の無意識を有意識へ転換させ、認識した感覚を受け入れることこそ重要であると考えた。この作用には制作者の意図が明白で革新的なオリジナル性を強く主張する必要性はないことを提示する。

また、陶芸制作での焼成後の選ぶという工程に着目した。明確な基準とは別に感覚的な感情がそこにはあるのだ。同じように鑑賞者が作品から受ける各々の感覚や感情の「変則性」を許容する作品価値を論じ、結びとする。